

- 一 問一 a 家畜 b 脳 c 痛快 d 境地 e 開花
 問二 まわりの人たちが作りあげた幻想である「らしさ」を捨てることが必要だと筆者は考える。雑草も人間が勝手に作り出したルールや「こうあるべき」という幻想からなる図鑑に書かれていることから自由に生えて成長し花を咲かせている点が同様だとしている。
 問三 苦手と覚えることを苦手と決めつけず、自分の可能性を追いながら、自分が得意とすること、ナンバー1になれるオンリー1のポジションを見出し、そこで勝負すればよい。
 問四 X 人間は単純な存在ではないこと、私たちの判断は一面的になりがちであることを知り、多面的に、様々な視点から判断することが大事だ。
 Y 自分の可能性を広げ、得意なことを見出すためには、苦手だと感じたことを苦手だと決めつけて捨てないことが大事だ。
- 二 問一 ① しょうね ② 感謝 ③ 英知
 問二 油
 問三 ガトーショコラ（高級感のある洋菓子なら可）
 問四 真紀ちゃんがにがてだが、彼女も自分のことがにがてなのではないか、それどころか、ひどく嫌われているのではないかと不安に感じていた。何げない自分の軽口に対して真紀ちゃんが怒りをあらわにしたことでショックを受け、自分に対する悪意を感じさせられた。
 問五 真紀ちゃんがにがてだという思いと真紀ちゃんを嫌ってはいけないという思いの間で悩んでいた。しかし、ミーヤンに、生まれつきの相性が悪い、「馬が合わない」のだから悩んでもしかたない、どっちがいい、悪いということではないと言われ、悩みから解放された。
 問六 「うちと真紀ちゃんは馬が合わへん」と、頭の中でくりかえすうちに、うまく言葉にならなかった真紀ちゃんとの間のぎくしゃくした感じの理由が、徐々に納得でき、気持ちも整理されて、心が軽くなっていった。
 問七 むかしの日本人がにがてな相手に対する腹立ちを馬や虫に託すことで解消してきたことに気づいた。タロに、にがてなクリストファーにどう対するかを語りかけながら、自分と真紀の関係を重ね合わせ、相性が悪いのだから怒ってもしかたない、とこれからの自分のことを考えている。

解 説

- 一 出典は、稲垣栄洋「はずれ者が進化をつくる 生き物をめぐる個性の秘密」〈筑摩書房〉。
- 問二 ——①では、「“本当の自分”らしさを探す」には、「まわりにまわりついている『らしさ』を捨ててみる必要がある」だと述べています。1頁下段1・2行めに、「らしさ」とは「まわりの人たちが作り上げた幻想ではない」か、とあります。このように考える筆者は、雑草に心惹かれる理由を「図鑑どおり」ではないことと述べています。「人間が勝手に作り出したルールや『こうあるべき』という幻想（＝図鑑）にとらわれない雑草の生き方」は、「まわりの人たちが作り上げた幻想（「らしさ」や「べき」）」を捨てる（否定する）生き方と同じであると言えます。
- 問三 まず——③から1頁下段最終行までで、いっぱい戦い、いっぱい負けるなかで傷つき苦しみながら、「ナンバー1になれるオンリー1のポジションを見つけた」、そして「戦わない戦略」にたどりついたと述べています。2頁上段（中略）以降では、「苦手なところで勝負する必要は」ない、「無限の可能性」があるのだから「勝手に苦手だと判断しないほうが良い」「『苦手』と決めつけ」ないようにと注意しながら、「得意なところで勝負すればいい」とまとめています。少し「苦手」だと感じたとしても、続けているうちに同じ分野の違う面で「得意」を発見できる可能性があるから、「苦手」と決めつけないようにと注意を促しています。

問四 わかりやすい説明文であれば、具体例の直前・直後に、その具体例を通していいかったこと（要点）が書かれています。説明文の読解技術の基本中の基本です。

X **オオカミ** …ゾウはどんな生き物か、という問いかけから始まり、「群盲象を評す」寓話を紹介し、「ゾウは鼻が長いというのは、ゾウの一面でしか」ないとまとめた直後に **オオカミ** の例を挙げています。「オオカミは恐ろしい動物と言われているが、「家族思いのとってもやさしい動物でもある」と説明しています。（中略）をはさんで「人間も同じ」だと述べ、人間は「単純な存在では」ないが、「一面を見て判断してしまいがち」である、そして、「周りの人が一方向からみたレッテル（評価・判断）」を信じてしまうことに気をつけるようにと述べています。「一面でしか」ないことを忘れると、“本当の自分”らしさを見失うことになるという話題へと進みます。

Y **モモンガ** …2 頁上段 4 行めで「無限の可能性のある若い皆さんは、勝手に苦手だと判断しないほうが良いかもしれません」と述べた後、歩くのが苦手なペンギン、木登りが上手とは言えないモモンガ、リフティングが苦手なサッカー選手、計算問題に対する苦手意識、と四つの具体例を並べています。苦手だからといってやめていたら、別の得意や長所、新たな展開もなかっただろうという例です。文章末で、「最後は、得意なところで勝負すればいい」が、「得意なことを探すためには、すぐに苦手と決めて捨ててしまわないということが大切」なのだとしめくくっています。

二 出典は、森絵都「あの子がにがて」（『あしたのことは』〈小峰書店〉所収）。

問三 柴犬のタロとアフガンハウンドのクリストファーとの大きな違いを「いもようかと **イ** くらいかけはなれ」ていると表現しています。安価な和菓子と高価な洋菓子との対比と考えてよいでしょう。原文では「ガトーショコラ」ですが、少し高級感のある、おしゃれな洋菓子名であれば○でしょう。

問四 「うち、おなじクラスに、にがてな女子がおるねん。／中沢真紀。」と物語は始まります。会話も成立しない、一緒にいても落ち着かない——そのうえ、真紀も自分のことがにがてにちがいない、いや、自分のことをひどく嫌っているのだろう、と水穂は思っています。そのような関係に「強烈なヒビ」が入ります。水穂の軽口に対して悪意を感じさせる真紀の言葉が放たれます。まるでなぐられたようなショックを受け、「なかなか復活でき」ないほど深く傷つきました。

問五 先生や親からは、人と仲良くしなければならぬ、という言葉が送られてくる。しかし、もう「限界」だ。真紀から自分は嫌われている。それに負けないうくらい自分は真紀を嫌っている——そんな思いを塾仲間のミーヤンにぶちまけると、ミーヤンからは「生まれながらに相性が悪い」「馬が合わない」だけなのだ、どっちがいいとか悪いとかということではない、という言葉が返ってきました。「なんとなく」ではありますが、その言葉によって、「人と仲良くしなければならぬ」という世間のルールと「真紀ちゃんが嫌いだ」という本音との間の緊張、葛藤から解放されたように感じられたのです。

問六 ——線部直前に「ふしぎやねん」とあります。——線部は「ふしぎ」に感じたことを説明しています。「うちと真紀ちゃんは馬が合わへん」と「頭のなかでなんでもくりかえしているうちに、なんや」、自分の心の中で変化し始めたことに気づきます。そして、自分が「みるみる元気になってきた」と感じています。この変化をより具体的に説明しているのが3 頁上段末尾の2 行から下段初めの2 行の部分です。「うまく言葉にならへんごくしゃくした感じ」に「馬が合わへん」という「名前（言葉）」を与えることで「すうっとむねが軽なった」というのです。「うまく言葉になら」なかった感覚や感情に適切な言葉を与えることで気持ちや思いが整理され、その結果、霧が晴れるように心も晴れてきたということです。読点で切ることによって、「うちと真紀ちゃんは馬が合わへん」という、「ごくしゃくした感じ」の理由を徐々に理解し、ある時点を過ぎると「みるみる元気になってきた」ことを効果的に表現しています。

問七 はっきりしない心の状態を適切な言葉で表現することで気持ちや思いが整理され、心が軽くなるということを水穂は経験しました。「馬が合わない」「虫が好かない」——相性の悪い相手に対する腹立ちを馬や虫に託してむかしの日本人は説明してきたのではないかと気づきます。飼っている柴犬・タロに、にがてなアフガンハウンド・クリストファーにどう対するかを語りかけてはいますが、自分と真紀との関係をそこに重ね合わせています。「カッときたときは、ぐっとのみこんで、そっと心でつぶやいたとき。『しゃあない、うちは「犬猿の仲」なんや』って」——タロに語りかけながら、それは、これからも真紀とかかわるときの自分に対する戒めの言葉でもあったのです。